2009年4月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻4号通巻229号　1991年1月8日第三種郵便物認可

たたかう労働運動の新たな潮流を！

月刊

交流センター

2009
4

□動労千葉結成30周年にあたって
布施宇一　動労千葉顧問

□3・25鉄建公団訴訟高裁判決を徹底弾劾する
4・25尼崎現地闘争に全国から総決起しよう！

□沖縄―本土をむすび道州制粉砕・米軍基地撤去を

全国労働組合交流センター

「労働者のストライキと国際的団結で戦争とめよう」ワーカーズアクション実行委員会主催のイラク反戦6周年3・20集会に青年労働者・学生を先頭に1850名が結集（代々木公園B地区野外ステージ）

月刊 交流センター 2009年4月号 No.229

目次

◉労働者の目　4大産別に、第2、第3の動労千葉の旗を！ …… 1

◉労働者のストライキと国際的団結で戦争とめよう！
3・20渋谷デモ基調報告
ワーカーズアクション実行委員会　星野勝紀 …… 2

◉ストライキを復権し、闘う労働組合を歴史の最前線に！
国鉄千葉動力車労働組合　執行委員長　田中康宏 …… 4

◉動労千葉結成30周年にあたって
布施宇一（動労千葉顧問） …… 6

◉動労千葉30年の軌跡 …… 12

◉3・6「道州制反対！　橋下打倒！
府庁前行動」基調報告 …… 14

◉ひめじょおん―女性部から
ジェコー労組のストライキに参加して …… 16

◉動労千葉労働学校で学ぼう！ …… 17

◉労働ニュース …… 18

●トヨタ賃下げも

◉3・25鉄建公団訴訟高裁判決徹底弾劾
4・25尼崎現地闘争に全国から総決起しよう！ …… 20

◉沖縄―本土をむすび道州制粉砕・米軍基地撤去を …… 22

◉読者のページ …… 24

●マンガ

〈労働者のストライキと団結の力で戦争をとめよう!〉をメインスローガンに、イラク反戦6周年全世界一斉行動として闘われた3・20渋谷デモは、1850人を結集して、階級的労働運動路線の真価を発揮しつつ、09決戦の突破口を押し拓くとともに、11月労働者集会1万人結集への展望を指し示すものとなった。

1~3月闘争は、世界大恐慌の時代における労働運動路線をめぐって、4者4団体派を先頭とする体制内勢力との激しい党派闘争として闘い抜かれた。

澎湃と湧き起こる労働者階級の怒りと結合し、動労千葉のストライキを前衛として、各地域交流センターが、職場生産点から自力の春闘を闘いとった地平は、従来とは異なる決定的な意義がある。

広島全国教研で、日教組本部は不起立で闘う青年労働者を怖れ、機動隊暴力をもって排除し正体を曝け出した。3・25東京高裁判決は、まさしく動労千葉を排除した4・4路線の全面的な破産を示している。ついに第2次国鉄決戦・1047名闘争の転換的発展の道が切り拓かれたのだ。

これは、「戦争か革命か」の時代に、いよいよわれわれ動労千葉派・交流センターが、4大産別(6大産別)という労働者階級本隊の「階級的指導部」として登場し、時代を変えるべき時がやってきたことを告げ知らせている。

日本帝国主義の底なしの危機は、「政労使共同宣言」の挙国一致体制をテコにして、労働者階級を国益主義・愛国主義へ動員しようと必死にあがいている。その最大の激突点が、道州制・民営化攻撃《自治体丸ごと民営化・教育の民営化、スト圧殺と解雇・賃下げ、階級的分断攻撃》なのである。

4大産別という権力機構内の労働組合でこそ、交流センターが、体制内指導部と本格的な党派闘争に着手し、今こそ、第2、第3の動労千葉をつくり出そう!

09決戦の柱は、体制内勢力との斬り合いに勝ちぬく、交流センターの鉄の団結と組織拡大=青年労働者の組織化である。組織し、組織し、組織しよう!

3・17動労千葉ストライキ総決起集会

労働者の目

4大産別に、第2、第3の動労千葉の旗を!

二本柳　実
副代表
教育労働者

イラク反戦６周年全世界一斉行動

労働者のストライキと国際的団結で戦争とめよう! 3・20 渋谷デモ 基調報告

ワーカーズアクション実行委員会
星野勝紀（JP 労組東京銀座支部）

03年のブッシュ政権下でのアメリカ帝国主義の延命をかけたイラク戦争開戦からわずか6年、歴史は今激しく動いています。全世界で巻き起こった反戦闘争は、資本主義の根幹を揺さぶる労働者階級の「生きさせろ!」の闘いに発展し、世界の帝国主義をぶっ倒す闘いへと進んでいます。その下で08年、アメリカ発の金融危機は世界金融大恐慌情勢へとまさに〈戦争か革命か〉が問われる時代に入りました。

09年3・20イラク反戦6周年を迎えた本日の行動は、動労千葉を先頭に呼びかけられてきた11月労働者集会でつくり出された日米韓の国際的な労働者階級の団結を先頭に全世界の労働者階級とつながっていることを冒頭確認したいと思います。

「労働運動の力で革命をやろう!」というスローガンを訴えて2年、はっきりしたことは労働運動の路線をめぐる闘いの中で、労働組合を甦らせる中に6千万労働者階級の勝利の展望を切りひらく一切があるということです。

昨年末より派遣切りという大量解雇攻撃が起きています。そして3月危機ということが言われ、これから先、街頭にクビを切られた労働者があふれかえる。何が起きてもおかしくない。こういう事態をどうやってみるのか。

アメリカ有数の証券会社リーマンブラザースの経営破綻の衝撃が全世界をかけめぐりました。GMなどビッグ3の崩壊的危機が始まっています。世界金融大恐慌情勢下ですべてが起こっています。

そもそも日本では国と地方を合わせて1000兆円の借金で、すでに国家財政は破綻しています。そのツケを労働者に押しつけるために「聖域なき構造改革」を叫んで小泉政権が登場しました。その後、小泉に代わって改憲を公約に登場した安倍は、わずか1年の間に辞任しました。その後の福田も倒れ、麻生内閣の発足。そうかと思えば、中川が酔っぱらってテレビの画面に登場し辞任すると、そんなお粗末な事態が起きている。世界第2位の経済大国の資本主義がもはや目の前で崩れています。

終身雇用制や年功序列型賃金、それらを前提とした企業内組合。そういうあり方を政府、資本家自らがぶっ壊しています。そして資本主義最後の延命策としての新自由主義政策「民営化・規制緩和と労働組合の解体」によって、95年に日経連が出した「9割の非正規と1割の正社員」という構造が目の前で起こっています。そして雇用調整だと称した派遣切り。「会社あっての労働者」という労働者支配が崩壊しています。起きている現実は、会社のために黙って働いてクビになる。そういう現実です。本来、支配階級である政府・資本家が労働者を黙らせておくには、何をおいてもメシを食わせていかなくてはなりません。それができなくなったのが今の時代です。「自己責任」と言って政府や資本家がやっていることは、自分たちの責任の一切を労働者に押し付けて生きながらえようとしていることだけです。

それにもかかわらず連合は何をやっているのか。日本経団連が打ち出した「労使一丸」に屈服し、挙げ句の果てには「労使共同宣言」を結んで全く闘わない。あらゆる体制内勢力が職場から立ち上がるわれわれ労働者を弾圧をしてくる。

国鉄闘争を軸にした分岐

今、日本階級闘争は国鉄闘争を軸に大きな分岐を迎えています。87年の国鉄分割民営化から総評解体・連合発足があり、それから労働組合の右旋回が始まりました。行き着いた先が派遣法の改悪で、これだって連合傘下の電機連合の提言によって始められたものです。そして現在の派遣切りです。

動労千葉が国鉄分割民営化に対して唯一ストライキで闘い、解雇者を出しながらも更なる団結を固め、ライフサイクル粉砕、組織拡

大を勝ち取っています。そして3日間の09春闘のストライキで訴えていることは、この時代にあって、まさに民営化絶対反対の路線の下に組織を拡大強化し、労働組合を甦らせようということです。

それに対して国鉄1047名解雇撤回の旗を下ろし、政治解決路線に転落した4者4団体は今日日本橋の坂本町公園でワールドピースナウ主催の集会に行っています。民営化賛成で戦争反対が闘えるのか。断じて否です。そして4者4団体の政治解決という路線がすでに破綻・失敗をしています。

第2の郵政民営化攻撃粉砕

私の職場も郵政民営化絶対反対の闘いが激しい路線闘争として進行しています。JPタワー（旧東京中郵廃局・高層テナントビル化）の問題、かんぽの宿の売却問題、こんなものは郵政民営化の破綻以外にはありません。郵政の小包部門であるゆうパックをJPEXという子会社にして、そこへの強制出向が第2の民営化として始まろうとしています。これとの闘いは待ったなしです。JP労組中央本部は民営化賛成から生産性向上運動と連合路線の急先鋒を行っています。挙げ句の果てには職場から闘うわれわれを阻害要因だと言っています。そしてこの09春闘にあたって言っていることは何か。「一部勢力によるストライキ等の行動により万一にも業務運行確保に支障を来すような状況が起こることは看過できません。……『新・パートナー宣言』にのっとって対応していく」とスト破り宣言を石川社長に提出しています。これが体制内派の行き着いた先の姿です。今かけられているJPEX子会社化と強制出向絶対反対の闘いを闘う団結の拡大と労働組合を甦らせる闘いと一体化して闘っていきたい。そういう決意です。

階級情勢は、新自由主義破綻という事態の中で進められている道州制、さらなる民営化との一大闘争の幕開けです。6千万労働者階級の勝利の展望はこの中にあります。戦争と民営化・労組解体の攻撃と闘う本日の集会・デモが新たな決定的な闘いになっています。「労使共同宣言」を粉砕し、職場から闘う団結をつくりだそう。

春闘で連合・全労連があたかも労働者の代表面をしています。やっていることは資本主義救済のために資本家と折り合いをつけているだけです。新自由主義攻撃を生み出した貧困、格差拡大への怒り、2千万ワーキングプアの青年労働者の怒り。激しい民営化攻撃にさらされている公務員労働者の怒り。徹底的な搾取、賃下げ、首切りをされるすべての労働者階級の怒り。もうひとつわずかな年金から保険料を抜き取られる、オヤジやオフクロ、じいさん、ばあさんの怒り。原油や飼料の高騰で生活が成り立たなくなった農民や漁民の怒り。あらゆるところから怒りの声が聞こえてくるではありませんか。

ソマリアへの自衛隊派兵。これは海賊を名目にしていますけれども、あれは海賊なんかではありません。漁場を荒らされて海を汚されてメシも食えなくなっている誇り高き漁民の怒りであり、まさに「生きさせろ」の闘いではありませんか。

今全世界に労働者階級の怒りが渦巻いています。資本家階級は全人民の怒りにさらされながらも搾取と戦争によってしか延命できない。追いつめられています。だったら引導を渡してやろう。

労働者の怒りを革命へ

歴史を見ればロシア革命だって「パンと平和」の要求から始まりました。今怒りが渦巻いている中で、一点の怒りが革命に向かうことだってありうるんです。レーニンが言っています。「古い支配の方法はすでに崩壊し、新しい方法は確立されていない。誰もが現状の変革を望んでいる。労働者階級が自発的に行動を開始している。このような情勢を革命情勢という」と。まさに今が革命情勢です。不況の底が見えないなどと言われている現在、始まりがあれば終わりがある。資本主義が終わりの時代が革命なんだ。そういうことをはっきりさせよう。政府も資本家もこれまでのあり方では、われわれ労働者を支配することは全くできません。だったら労働者が取って代わろう。

労働組合をめぐる路線闘争が全世界の課題になっています。本日のイラク反戦6周年の怒りを新たな出発点として09年決戦に躍り出よう。共に闘いましょう。

動労千葉3・17〜19春闘ストライキ貫徹

ストライキを復権し、闘う労働組合を歴史の最前線に！

国鉄千葉動力車労働組合　執行委員長　田中康宏

われわれは国鉄分割民営化の原点に戻らなくてはいけない。労働運動全体がその原点に戻り、そこから出発しなくてはいけない。22年前、僕らは国鉄分割民営化攻撃に対し、クビをかけて闘いに立ち上がりました。１９８１年から87年までに20万人の国鉄労働者が職場を追われた。だけど、当時はまだ国鉄という一企業の中で起きた問題だった。今起きているのは、派遣や非正規雇用の労働者２００万人のクビ切りです。あるいは公務員労働者３６０万人を一旦解雇するという攻撃です。社会全体が国鉄分割民営化攻撃の中に叩き込まれています。

資本主義体制がガタガタと崩れ落ちようとしている状況の中で、国鉄分割民営化攻撃の全社会化というべき事態が起きている。そう考えると、こうした攻撃に立ち向かって動労千葉が団結を守り抜いてきたことのもつ意味は大きい。国鉄分割民営化の決着をつけるとき日本の労働運動は間違いなく復活します。

３月16日、ＪＲ東日本本社は「ストライキに関する申し入れ」なるものを出してきました。信濃川発電所の不正取水問題に触れて、われわれのストライキを「信頼回復に取り組んでいる全社員を欺くものだ」と非難している。全社員を欺き、社会全体を欺いたのは一体誰なんだ。取水データを計測するプログラムを改ざんし、国土交通省にウソの報告書を出していた確信犯です。現場労働者はこんな卑劣なことがやられているということなど知りようもなかった。それで社長は減給処分だという。現場は携帯メールで一発でクビになっている。こんな現実があるのか。ＪＲの民営化体制は末期症状です。

ストライキの課題について

今回のストライキに込めた一番の思いは、大恐慌への突入という時代にストライキを復権させたいということです。それ抜きに労働者がクビを切られ、路頭に迷う現状を変えることはできません。今回のストライキで、労働組合とは素晴らしいものなんだとアピールしたい。労働組合の大切さが、数百万の労働者を襲っている首切り攻撃という一番悪い形で証明されている。なんでこんなことが起きたのか。最大の原因は民営化・規制緩和、競争原理、自己責任だといって新自由主義政策を推し進めた政府や財界にあります。だけど、労働組合がそれに屈服し、認めたからこんな現状になったんじゃないですか。99年、04年の派遣法の改悪。これで製造業も含めて派遣労働が全面解禁になり、派遣は超低賃金労働の代名詞になった。このときに連合は、労働者が新しい働き方、多様な働き方を求めていると、政府や財界と全く同じことを言った。労働組合が闘う路線と方針を持っていたら、こんなことは起きていない。労働組合の路線や方針がどれほど労働者ひとり一人の未来を左右するものなのか。そのことを逆に証明しています。労働組合とは素晴らしいものだ。だけど腐ったときには労働者にとって最悪の役割を果たす。この点を今回のストライキの中でわれわれの団結を核心としてもう一度つかみなおさなければいけない。

この20年間何が起きたのか。例えばＪＲです。分割民営化で一番変わったのはＪＲの経営陣の賃金です。ＪＲ東日本の取締役25人で年間９億５１００万円の役員報酬をとっている。逆に現場では、保線も電力も信号通信も検修も駅も、全部外注化し、非正規職労働者に置き換えていくということが進んでいる。駅の契約社員は１年ごとに契約を更新し、最長５年でクビです。ＪＲは毎年膨大な労働をクビにしている。ＪＲの企業憲章というのがあるんだけど、それには「環境を守ることは人類普遍の原理だ」と謳っています。それでやることは信濃川取水問題だ。腹の底から怒らなきゃいけない。

昨日、ＪＲ東日本本社、千葉支社とストライキに向けた最終的な交渉をしました。われわれは、３

万8千円の賃上げ獲得、業務外注化・ライフサイクル制度の白紙撤回、そして、運転保安確立や65歳まで働き続けることのできる労働条件の確立を基本要求として掲げています。しかし交渉は全部決裂です。

後で交渉報告があるので、私からは運転保安上の問題についてだけ一言触れておきますが、3月4日、また京葉線でレール破断が起きています。われわれは不当処分を受けながら安全運転闘争をやり、04年から07年までの期間に200㎞を超えるレールを交換させて2年間は止まっていましたが、そうした対処療法では本質的な解決にならない。それほど根本的に安全が崩壊しているということです。だから、線路の巡回周期を外注化前の頻度に戻せと要求した。そんなことは出来る話です。しかし一切ゼロ回答です。

あるいはこの間ずっと問題にしてきた下り勾配問題。数十箇所の下り勾配で速度違反の運転が強制されていた。少なくとも間違っていたことを認めたんだから、速度制限の標識を建てろという当然の要求をした。しかしこれもやりません。こんな現実に対し、断固としてストライキを貫徹したい。

われわれが今回の闘争で求めるものは、社会全体に向かっては派遣法なんか撤廃しろ、労働者のクビを切るなということです。そのためにすべての労働者が団結しようと訴えたい。資本家だけがさんざんボロ儲けし、そして崩壊した。そうしたら「助けてくれ、助けてくれ」と政府に救済を求めている。こんな強欲な資本家が支配している社会はぶっ倒さなきゃいけない。

1047名問題について

本日からのストライキのもう一つの課題は、1047名闘争の勝利をこじ開けることです。4者4団体は、自民党や公明党、民主党にあたり構わず泣き付いて「解決」を求めている。しかし今回の政治解決運動も破産しました。東京高裁は3月25日に判決を指定した。一体同じことを何回やればわかるのか。だけどこれは、国鉄分割民営化反対闘争の決定的大きさを逆に示しています。1047名闘争は、国鉄分割民営化から22年を経ても未だ決着がつかないという現実、この闘いを潰さなければこれ以上先に進めないという現実を敵に強制してきました。なんでそういう闘いをドブに投げ捨てるのか。

1047名闘争がグラグラになってきた途端に道州制が出てきた。道州制で公務員労働者410万人のうち警察と自衛隊を除いて、全員一旦解雇すると言っている。今、社会には怒りの声が満ちている。労働者にとってはチャンスです。こういう情勢が来る時のために1047名闘争を歯を食いしばって頑張ってきた。闘いの心棒が立ったらみんな団結して闘いに立ち上がる条件が生まれています。1047名闘争が全体を率いて闘い抜くチャンスが来ています。本当にこれからが大きな歴史の分かれ目です。動労千葉は小さな力ですけども、その先頭に立つという戦闘宣言を09春闘で発したい。

最大の核心は組織拡大

最大の核心は組織拡大の実現です。もう一歩闘いを前に進め、平成採が次々に動労千葉に結集してくる情勢をつくり出すことができれば、動労千葉に対する世の中の見方はがらっと変わります。国鉄分割民営化反対で40人クビを出しながら団結を守って今日まで闘い抜いたその組合が組織を拡大し始めたとなったら、このインパクトは日本の労働運動を絶対に塗り替えます。国鉄闘争自体がそういう位置を持っているからです。世の中の情勢を全部動かすテコになる気概で闘う。今回のストライキでもJR当局のシフトも絶対に組織拡大をさせないということに一切の焦点を絞っています。だから平成採の仲間を動労千葉に結集するということは、途方もなく困難です。だけど、このストライキを契機に全組合員の総力を結集して組織拡大をやりきって、動労千葉を誰にも否定することが出来ないような存在として登場させて、すべてのクビを切られた労働者たちの怒り、賃金を下げられた労働者の怒り、すべての怒りをその下に結集して進む。そういうきっかけに今日から明日、明後日の3日間のストライキをしたい。

［3月17日の「スト貫徹！　動労千葉総決起集会」（千葉市民会館）での発言を編集部の責任でまとめたものです。］

動労千葉結成30周年記念レセプション　記念講演

動労千葉結成30周年にあたって

布施　宇一（動労千葉顧問）

結成30周年の記念講演でちょっと荷が重いのですが、いわゆる大所高所論的なことは、最近、中野常任顧問がまとめた『俺たちは鉄路に生きる2』『同3』と新版『甦る労働組合』に分かりやすく出されていますし、最近の情勢は田中委員長以下の現役のみなさんの方が、きちんと議論し、勉強していると思いますので、私からは、自分なりに職場で実践してきたことを中心に話していきたい。

千葉気動車区――私の原点

千葉気動車区最後のストライキのことをまず話したい。

私は1961年に19歳で国鉄に就職し新小岩機関区に配属され、機関助士になったばかりの1963年に千葉気動車区へ転勤、66年に気動車運転士になりました。ちょうどその頃マル生攻撃が始まり、その激動のなかで、71年、何の経験もないまま支部執行委員になり、72年・船橋事故、73年・上尾暴動という状況下で支部書記長になったと思ったら、75年には千葉気動車区廃止という渦の中にたたき込まれていました。

この5年間ぐらいの間に、今日に至る労働運動に対する私の基本的考え方が固まった。そういう意味で千葉気動車区は私の原点です。

マル生で資本の労働運動攻撃の本質と労働運動のあり方を嫌というほど考えさせられました。当時鉄道公安官が職場に常駐するような状況があるのに、地方本部の三役がほとんど職場へ来ないことに、当局に対する以上の怒りを持っていたことを覚えています。

そして船橋事故と基地廃止。労働者の生存と生活を根底から奪い取ることに対する怒り。この二つの怒りが、私の労働運動の出発点であり原点であったと、今にして思います。

事故に対する怒り

気動車区最後のストライキは、踏切事故で大型トラックと衝突し、組合員が大腿骨骨折の大ケガをしたことに対する抗議闘争として闘われました。当該運転士は現ＯＢ会長の中村さんで、彼は今でも後遺症の痛みに悩まされています。

この事故は船橋事故のように大々的に報道されることはありませんでしたが、気動車区の職場的には乗務員を中心に船橋事故に対する以上の強い怒りがありました。

当時、74年頃はチンチンチンチンの警報機がついていない踏切がいっぱいあり、馬車がやっと通れるような感じの踏切に大型自動車が入ってくる。そこを木造車体の気動車で運転する。当局に改善要求を出しても「予算がない」などの理由で放置され、「誰かが（事故で）死なないと直さないよ」と半ばヤケ気味に語られるような状況がありました。

それらへの激しい怒りと、「事故は仕方ない」の雰囲気が組織的にも個別労働者的にも混在する中で、ＡＴＳ闘争や踏切安全闘争を地道に積み上げてきた結果として、当時の中央本部などの「事故問題は労働運動になじまない」などの制動を打ち破ってストライキにこぎ着けたわけです。地本が関川・中野体制になっていたことも、安全問題をストライキで闘う決定的な要素としてありました。

スト当日は雨で、気動車区から千葉鉄道管理局までのデモ行進のときは相当強く降っていました。その中を、57歳から18歳までの400名の組合員が、文句も言わずにデモをやった。私は支部書記長として、「絶対ストで闘うべきだ」という立場で組織化をしたわけですが、このデモ隊列を見て「よくここまで来たものだ」と感慨深かったことを覚えています。

私が国鉄へ就職した60年頃は2百万余だった千葉県の人口が00年には6百万を超えるという過密化への過程の状況があって、要員配

置も安全対策も、輸送需要に追いつかない中で、労働者は命の危険にさらされていた。それが船橋事故であり、このストの対象になった事故であったわけです。

今では断定的に言えますが、当時はそうは言えない。運転保安問題は組合でやることじゃないみたいな雰囲気が強くあって、危険踏切の安全確認闘争だとかＡＴＳ闘争だとかの指令を出してもやらない人がいっぱいいて、若手がこの踏切は時速何キロという看板を持って、激励行動と称する「監視」をやったりした。ＡＴＳ闘争も最初は警報がなったら必ず一旦停止するという形でやったけれど、停車駅でホームの真ん中で止まると、乗降客の混乱などで負傷事故が起こる恐れがあるなど、乗客との摩擦が強すぎるので所定の停止位置まで低速で持っていくという形に変えました。そういうことを職場の中で何回も何回も議論して、相当激しい意見の対立もあったりしても、日常的職場抵抗闘争として積み上げてきた。その結果としてこの闘争になったんだと、嬉しかったわけです。

基地廃止反対の闘い

基地統廃合も全く同じです。国鉄の歴史なんて事故と基地統廃合の連続です。千葉鉄道管理局が管轄する千葉県内と千葉・東京を結ぶ鉄道は、高度経済成長が始まった当初は千葉から東京方面は電車、千葉からの下り各線はディーゼル（気動車）化するという計画だったんです。電車を走らせるには架線を引いたり経費がかかるけれど、気動車化なら動力車・車両を代えるだけでＳＬが走っていた線路をそのまま使えるという考え方だったわけです。しかし急激な人口増加のため管内を全線電化するしかないと変わった。千葉県内の旅客列車を一手に担っていた車両と乗務員の基地が、設立から20年で廃止されることになった。

支部執行委員の経験が２年しかない30歳の私が、マル生の渦中で支部書記長になり、なった途端に基地廃止に直面しました。支部長・山口さん35歳、副支部長・鶴岡さん34歳。30代前半の三役で57歳から18歳までの５００名の基地廃止に対応することになったわけです。

廃止される当該区ですから他労組や職制も含め全員が配置転換の対象で、電車への転換教育が必要になる。「関係ない人」は一人もいないわけです。当然、組合員の気持ちは、まずは「廃止反対」となる。しかし、総武線の複々線化の工事がすでに始まっており、基地の面積が大幅に減らされ、高架化されることと併せて基地存続が物理的には無理だということは、客観的には納得せざるを得ない。

高齢者を中心に基地問題は当局がやることだから仕方がないというあきらめもある中で、労働者の転勤や職務内容も含めた労働条件の大幅な変更であり、きちんと要求を出して交渉し、ストも含む闘いをやるべきだという主張も当然ある。では組合員の本当の気持ちはどうなんだ。それを知るため個別オルグから始めようと執行委員会が手分けをしてやりました。

結果的に分かったことは、組合員の大勢は、電化は社会全体の流れで止まらない、労働条件が折り合いが付けられるかどうかが問題だということであり、そして、最大の関心事は、各人がどこへ配置転換されるかということでした。

当時の、今でもそうじゃないかと思うけれど、国鉄労働者は田舎の出身者が多かった。百姓や漁師の次男坊や三男坊、長男でもいわゆる「半農半鉄」を目指す者、そういう人達が多かったんです。出身地で言うと、千葉の場合は、館山、勝浦、銚子とか各線の末端の方から新小岩、津田沼、千葉方面へ通勤している人が相当多く、従って、運転職場の場合、各自の出身地に近い館山、勝浦、銚子方面の区への転勤希望者の割合が非常に高いということが日常的にあって、そのことが気動車区廃止反対の闘いの中でも大きく浮上してきました。

職場での労働運動の実践

千葉管内の運転職場を歴史的に概観すると、蒸気機関車の時代には新小岩、千葉、佐倉、成田、木更津、館山、勝浦、銚子に基地がありました。これは蒸気機関に絶対必要な水と燃料である石炭の補給に必要な基地配置で、この体制に総武線が電化されるときに津田沼電車区が加わり、千葉の運転職場は構成されていました。

55年体制下の「動力の近代化」計画で千葉気動車区が設置されると、千葉から下り方面の旅客関係

の車両と乗務員の業務は気動車区に集中させ、外周区には乗務員の宿泊管理の当直や滞留車両の管理に関わる検査修繕業務など必要最小限の要員を残すだけでした。

その後、70年代に入り、成田線、内房線、外房線と電化される過程での反合・運転保安確立の闘いの一環として「居住地に近い職場の拡大」を掲げ、気動車区の業務を減らし、外周区の乗務員配置を増やしていく取り組みをやって一定の成果をあげていましたが、廃止時点でも外周区への転勤を希望する者が、まだ多く残っていることがはっきりしてきたのです。

そこで、支部執行委員会では「配転問題を各個別組合員が納得する形できちっと解決すること」を最重点要求とし、「居住地に近い職場」を軸に全員を希望地に配属させる闘いとして取り組むことを確認しました。

しかし、問題はそれで解決するほど甘くありません。総論はこの確認でいいわけですが、具体的に誰がどこへ転属するのかになると簡単じゃない。大半の人は希望する配属先を言って「そこへ行ければいいよ」となる。けれど最後まで希望地を言わない人が何人か出てくる。何回も何回も足を運び話をしてもはっきりしない。大方針を決めてついて来ないヤツは切り捨てるというなら簡単です。しかしそれをやったらおしまいです。

労働者にはいろいろな事情がある。「障害者」の家族を抱えているとか、高齢の寝たきり老親を抱えているとか、子供のこととか内容は千差万別ですが、当該労働者が千葉気動車区に勤務することによって成り立っている日々の生活がある。幕張に転勤しても木更津へ行ってもその生活のバランスが崩れてしまう。どうしたらいいか結論は出ていないが他人に相談はしたくない事情がある。というようなことで首を立てに振れない人が必ずいる。それが労働現場というものです。そのいわば一番弱い立場の人の心にどれだけ迫れるか。職場で労働運動を実践するということは、具体的にはそういうことです。

さらけ出された労働運動の実態

二つ目に、少し違った視点からこの問題を観てみたい。国鉄分割・民営化というとてつもない攻撃に対して、ストライキで立ち向かったのは1100名の動労千葉だけであった。総評が「5000万人署名」を取り組んだ頃まではみんな建前論でいろいろ言っていたけれど、JRに移行する頃は惨憺たる状況になっていた。

中曽根が国鉄民営化を通して総評も社会党もつぶすという狙いを明確に持っていたことに対して、社共・総評といわれた人たちは余りにも大アマだった。労働組合の指導部として、ナショナルセンターとして、革新政党として腐りきっていたということです。

私は85年第1波ストの組織化の過程で、国労中央の中枢役員からはっきりと聞きました。「国労は動労千葉のストライキ方針を支持しない。国労は現在12万人の組合員がいる。3人にひとり首を切られても8万人残る。国労はこの8万人に依拠し、社会党を中心とする政治闘争で闘う」というのです。

私は唖然とし、背筋が寒くなる感じになりました。この彼の言う方針が職場に下りてきたらどうなるのか。先ほどの基地廃止問題にたとえてみて下さい。400名いる組合員のうち300人は希望通り配転させてやる。しかし残りの100人は解雇する。退職金は払うから納得しろと、「闘う」という言葉をちりばめていろいろと書いてあっても、職場での具体的現実としては、こういう方針なんです。

上部機関の役員は「政治的」に判断するかもしれないけれど、職場・生産点は絶対に納得できない。「この方針が200人の自殺者を出した」と言い切ってもいい。中曽根がどんなひどい首切り方針を打ち出しても、国労が「座して死を待つよりも起って闘う」という方針を出せば、こんなに多くの労働者を死なせなくてもすんだ。

動労千葉の闘いの核心

動労千葉が追求してきた闘いの核心は、国鉄時代の「反マル生」「船橋事故」「三里塚・ジェット燃料輸送阻止」「分離・独立」「分割・民営化」から、JRになってからの「12・5スト」「前倒しスト」「1047名闘争」と、変わらずに受け継がれています。

それは情勢認識についてしつこいほど議論し全体化すること、労働者の可能性に確信を持って職

場・生産点から決起すること、そして何よりもいちばん立場の弱いものを決して切り捨てないこと。この三つです。

国鉄分割民営化とJRになってからの20年間の闘いのなかに、日本の労働運動の本質的問題が全て内包されています。分割・民営化に対して動労千葉は全員でストライキに決起して闘った。動労革マルは国労攻撃と労働者切捨ての尖兵として生き残る道を選び、20年後の今日、「組合のカネで役員個人の別荘を買った」とマスコミにたたかれ、新潟を中心に組織分裂も起こしている。

社共・総評といわれた連中は、どうだったのか。まず「3人にひとり」の首切りを前提とした「社会党を中心とした政治闘争」を唱えた連中は総評解散・社会党消滅の動きの中で、どこへ行ったのか分からない状況になっている。

89年11・20ストの先頭に立つ布施副委員長（当時）

革同だの協会だの「左派」を自認していた活動家たちが、JR採用の選別が始まると、支部や分会の役員を一斉に辞任した。「役員をやっているとJRに残れない」と判断して活動家を逃がした。一般組合員はどうなるんだ。ハダカで首切り攻撃にさらされるということです。この革同や協会や新左翼崩れとか、国労内外で「左派」と言われていた者たちが、今、「1047名闘争」を「賞味期限切れ」だとして切り捨てようとしている。

彼らに共通していることは、権力中枢が体制的生き残りをかけて仕掛けてくる攻撃に対して、職場・生産点に依拠して闘うという視点を持たず政治的テクニックで自党派の利害だけを優先させているということです。このような党派や派閥集団とその活動家たちに、職場・生産点の真の階級的信頼が勝ち取れるのでしょうか。

いずれにしても、分割・民営化に対して原則的闘いを貫徹した動労千葉は、40名の解雇をはじめとする大量不当処分攻撃をはね返し、JR移行後2年目には「12・5」の列車を止めるストライキに決起し、「前倒し」へ続く3波のストで「1047名闘争団」の形成とJR総連分裂への起爆剤となり、JR20年の闘いの元の元を創り、今日に至ったわけです。この闘いを可能たらしめたのは、職場・生産点が指導部を信頼して決起したという一点に尽きます。

中曽根・小泉と社共・総評

国鉄分割・民営化後20余年の今、中曽根がやったことは何だったのかあらためて考えることがあります。モラルという言葉で表現するのが適当かどうか分からないんだけれど、人間社会の一番基盤にあるそういうものをぶっ壊したということです。

人間は社会を構成しなければ生きていけない動物です。では「よい社会」とは何か。それは一番弱い人が他の構成員と一緒に生きて行ける社会ではないか。人類は農業を獲得して定住し、いろいろな変遷を経て資本主義社会に到達した。資本主義社会は一番進化した社会だけれども、労働者・人民への搾取を前提としないと成り立たない社会だから、革命を起こして社会主義社会を創らなければならないという定義も、「能力に応じて働き、必要に応じて働く」や「ひとりが万人のために、万人が一人のために」という言葉も、弱いものを切り捨ててはいけないという思想性に裏付けられて、初めて社会的正義性を持ちます。

中曽根が「国鉄」でやったことは、国鉄を起点に、営利万能で弱い者を切り捨て、弱肉強食の社会を実現させていくということです。

それを、マスコミを総動員して、「国鉄職員は働きが悪い」の嘘で労働者の抵抗を封じるという手法で強行した。国鉄赤字とは、要するに東海道、山陽、東北、上越と続く新幹線建設の資金を国鉄に貸し付け、銀行とゼネコンを儲けさせたツケを累積させたものに過ぎないものです。しかも27兆円の累積赤字に加えて、どさくさに紛れてさらに10兆円の借金を国鉄に強制し、それを地方にバラ撒き自民党サイドの反対を抑え込み、ゼネコンをさらに儲けさせて強行した。

これに対して、「労働者は団結すれば強い。団結して闘おう」と言って学習会をやり、支部や分会の役員選挙になると家庭訪問までして役員になりたがっていた革同

や協会の連中が、いざ決戦のときになったら一斉に役員を辞めていく。これを見ていた国労内外の労働者はどう考えたらいいのか。

社共・総評はまったく当てにならない。動労革マルは当局の尖兵になってしまった。ここで職場・生産点のひとり一人の労働者に突きつけられていることは、強い者・政府は何をやってもよい、弱い者・労働者は何をやられてもしょうがないという現実です。

国鉄で中曽根が開始し、小泉が全面化させた「効率化」「営利優先」の弱者切り捨て攻撃が、社共・総評や動労革マルなどの逃亡、転向、裏切りによって加速され、非正規労働者の爆発的増加や「いじめ」などにつながり、今日の暗い労働現場が形成されてきたのです。われわれは力いっぱい闘ったけれど力が足りなかった。職場・生産点からの闘いを基礎に盛り返していかなければなりません。

力強い職場からの決起

現在の私の愛読書は『俺たちは鉄路に生きる3』です。

特に、現役の組合員が職場で闘ったことを語り合う座談会は繰り返し読むし、何度読んでも飽きない。基地廃止反対闘争の具体的展開と役員であることの苦悩。検修職場での構内事故に対する闘いなどなど。私は職場へ行って組合員と話をすると元気の出る人間だった。定年後7年目の今は職場へ行けないけど、この本を読んでいると職場で話し込んでいた時と同じ気分になっている自分に気づいて、思わずウルウルしたりします。

『俺たちは鉄路に生きる3』（労働者学習センター刊）

特に、一番新しい基地廃止攻撃との闘いである館山支部の座談会は、35年も前に、私が千葉気動車区廃止反対で闘った時と全く同じだ。市役所へ行くとか個別の戦術は異なっても、個別組合員の配転先のことが最大の問題であることなど、昔も今も、事柄の本質は変わらないんだなと思います。

実は、今日の話を千葉気動車区から始めたのもこの本に触発されたからなんだ。

先ほど、国鉄・ＪＲの歴史は事故と基地廃止の連続なんだと言ったけれど、１９７５年の気動車区廃止から館山までの間に、成田、蘇我、佐倉、勝浦が廃止されている。廃止まで行かなくても、ほとんどの職場が、昔とは大きく変わっている。

館山の座談会で「一本書き」で転勤希望を１００パーセント勝ちとった。これからは新しい職場で動労千葉の闘いを担って行くんだというくだりを読んで、俺も気動車区支部の機関紙最終号（別冊）に歴代支部長の座談会を載せ、編集後記に「新しい職場で戦闘的労働運動を追求しよう」と書いたっけな、などと思い出すと、ホントに泣けてくるよな。

それから、館山の座談会に出席している堀江支部長などの生まれた年が１９６０年前後なんだよ。そこでまた考えちゃう。俺が就職した頃生まれ、俺が気動車区廃止反対を闘っている頃小学生だったヤツが、今は支部長で基地廃止反対闘争を闘っているのかと思うと、不思議な気分になる。

そういう個人的感傷はおくとしても、30年間一貫して職場を起点に闘い抜くことをやめなかった動労千葉だから、分割・民営化をはじめとする多くの苦難をのりこえることができたし、外に向かって呼びかけることもできるし、この席にも米韓から30年を祝いに来てくれるような連帯の広がりも獲得することができたということです。

労働運動の戦闘的再生に向けて

ＪＲ移行後の階級情勢が厳しさの連続であったことは事実ですが、しかし、この間、20年間も、物販闘争などで「１０４７名闘争団」を支えてくれた労働者が推定１００万人以上いることも厳然たる事実です。

闘いがないときは「左派」を気取っていた人たちが、「１０４７名闘争は賞味期限切れだ」と言って、この１００万人の想いをも断ち切ろうとしています。この人たちは国鉄分割・民営化に対して職場・生産点からの決起で対抗するという発想を持ったことがありません。

そもそも、この攻撃は、５年近くにわたって「（国鉄である）３月31日までに退職すればこれだけの退職金と年金を保証するが（ＪＲになる）４月１日以降は（ＪＲに採用されるかどうかも含め責任

は持てない」ということを家庭訪問して家族をかき口説くことまでして、特に50歳以上の人をターゲットに退職を強要するという形で強行されたものです。

したがって職場で具体的に対応する方針を出さない限り、労働者は、マルハダカでこの攻撃にさらされ続けるわけで、わけの分からない「政治闘争」しか言わない指導部を持った国労の組合員を中心に２００人もの自殺者が出てしまったわけです。

この「左派」の人たちは動労千葉がストライキで闘ったことすら無視しようとしていますが、動労千葉が職場に依拠した闘いの方針を堅持し実践し続ければ、この１００万人をわれわれが獲得することは可能だし、派遣切りなどで苦しんでいる多くの労働者との連帯・共闘も充分に展望できるし、日本労働運動の戦闘的再生へ向けた芽も大きくあると思います。

職場からの決起による成長

ここまで動労千葉が職場・生産点で闘いを実践してきたことを中心に話をさせてもらいました。これからも自分たちの労働現場での闘いを大事にしながら、そこから世界を見る構えで闘いを進めてもらいたい。

その上で、今、動労千葉に求められている最大の課題は組織拡大です。どんな闘いも組織拡大に結びつけ、そこに収斂させていく構えが必要です。

田中委員長体制になって7年。最大の成果は平成採を獲得し「平成採を二桁にして青年部を作る」ことを展望できるところまで闘いを押し上げたことです。この勢いを止めることなく闘いを前進させることが、今、何より求められています。

発足当初は、当然ながら、相当大変だった田中体制を成長させたのは、幕張から開始された地上勤の有機溶剤問題をはじめとする職場闘争と、乗務員分科を中心とする線路問題などの長期にわたる実践でした。この闘いが幕張の構内事故乗務員に対する首切り攻撃阻止と館山・木更津の基地廃止反対の闘いを通して、田中体制総体のレベルを一挙に押し上げた。そしてこの総体としての充実が平成採の獲得に結びついたということです。『3』を読むと、そのことがよく分かります。

これからも職場での原則的闘いを貫徹することを通して組織拡大を勝ちとり、組織拡大を職場闘争に反映させていくという戦略・戦術をもって前進してもらいたい。

がんばれ！　平成採

最後に、平成採用の諸君にひとつだけ言っておきたい。

「動労千葉へようこそ」とだけ言うつもりはありません。このような時期に、もろもろの制動を振り切って動労千葉へ結集したわけですから、自分の人生に関わる一定の覚悟をもっている諸君だと思って言うのですが、君たちが先頭に立って組織拡大をやってもらいたい。できるだけ早く、できるだけ大勢の組合員を獲得して青年部を復活させ、動労千葉の闘いの先頭に立ってもらいたい。そして、田中体制が安穏に陥ってダメだと思ったら打倒する。それくらいの気概をもってがんばってもらいたい。

本日冒頭に話したように、私は、20代の後半から30代のはじめにかけた千葉気動車区での5年間で、その後の人生を決めるような決断をしました。私だけでなく同じ年代の多くの仲間たちも決断をした。その延長上に、前の世代をのりこえてやってきた歴史が形成されたということです。

50年近く過ぎた今、その決断を後悔していないと言うより、あの時、別の決断をしていたら後悔していたに違いない、という想いが強くあります。

それで、あの頃の私と同じ年代の平成採の諸君に、せっかく決断して動労千葉へ来たんだから、後で後悔しないように力いっぱい生きてほしいという気持ちから、老婆心ながら言わせてもらいました。

君たちの時代になった時に、JRの職場で多数派といえる実体を持ち、日本の労働運動の戦闘的再生の先頭に立ち、海外連帯・資本主義体制打倒の闘いを担いうるような力をつけていってもらいたい。そのことを最後に言って終わりにさせてもらいます。

職場での闘いが何より大事だと信じてやってきた私の気持ちを感じていただければ嬉しい。どうもありがとうございました。

（3月8日、DC会館での動労千葉結成30周年記念レセプションにおける記念講演に加筆修正）

動労千葉30年の軌跡

1979年3月30日、動労千葉地本臨時大会において革マルが占拠する動労本部からの**分離・独立**を満場一致で決定、ただちに国鉄千葉動力車労働組合の結成大会を行った。

動労千葉の分離・独立に対し、動労本部革マルは「オルグ」と称して各支部結成大会におしかけ大規模な組織破壊攻撃を繰り返した。

1979年4月21日、新小岩支部結成大会には600名の襲撃部隊がおしかけたが、青年部を先頭に各支部からの緊急動員で必死に防戦し結成大会を防衛した。

ジェット燃料貨車輸送阻止闘争は、三里塚反対同盟との労農連帯と反合・運転保安を掲げて長期的に展開された。ジェット燃料貨車輸送の延長に対して闘われた81年3月のストライキでは4名が不当解雇。
（写真は81年3月6日ストライキ）

1982年中曽根内閣発足以降、国鉄分割・民営化攻撃が本格化し、マスコミによる「ヤミ・カラ」キャンペーンや「国鉄労働者国賊」論が満展開された。動労本部革マルの転向、国労本部の無方針という中で、唯一動労千葉だけが「国鉄労働者10万人の首切り反対」「国鉄を第2の日航にするな」を掲げ、2波のストライキに立ち上がった。（写真は86年2月15日、第1波スト20名解雇を弾劾し、第2波24時間ストライキに決起した千葉運転区支部）

分割・民営化反対ストへの報復処分として28名の大量不当解雇攻撃がかけられたが、裁判闘争と職場抵抗闘争で闘いぬく中で、97年3月、28名全員の解雇撤回の勝利和解かちとる。（写真は1996年、争議団総会に集まった解雇者）また、JR不採用となった清算事業団12名（故人含む）は、現在も1047名闘争の先頭で闘っている。

闘いなくして安全なし

レール破断や尼ヶ崎事故など、分割・民営化の矛盾がJRの安全崩壊として爆発する中、反合運転保安闘争を闘いぬく。（安全運転闘争で当局の背面監視のなか運転する組合員　06年3月10日東京駅）

1047名の解雇撤回！

国鉄分割・民営化以降、23年にわたる激しい組織破壊攻撃を跳ね返し、第2の分割・民営化攻撃と真正面から闘いぬいて、今なお千葉だけが業務の外注化を阻止し続けている。

89年12・5　JR発足後初の乗務員ストライキで列車を止める津田沼支部のスト突入集会

解雇撤回を投げ捨てた4者4団体と対決し、1047名の解雇撤回にむけ原則を守り闘いぬく（2008年2月16日国鉄集会）

「闘う労働組合の全国ネットワークをつくろう」をスローガンに始まった11月集会は98年に全日建関西生コン支部、港合同とともに三労組呼びかけとなり、03年からは日米韓の国際連帯集会に発展した。（03年11・9全国労働者集会）

組織拡大

平成採の青年労働者が次々と動労千葉に結集
（09年1月10日　団結旗開き）

3・6「道州制反対！ 橋下打倒！ 府庁前行動」基調報告

豊中市職女性部長　深町加代子

「勝利だ」と言いたいと思います。うちの組合でも、今日の集会をめぐってさまざまな議論があって、ほんまに真っ二つに割れた。今日、職場に「おはよう」と行ったら「女性部ニュース」が配られていました。「えっこれ何!?」組合執行部が女性部ニュースを偽造して「3・6集会はない」と配っていました。驚くでしょう。ほんまにこういうしようもない組合本部でもやる時は牙をむき出しにやってくる。物事がはっきりしてええなあということで断固「3・6行動はある」と言って、また朝からずっとビラをまいていました。

そういう激しい分岐の中で、女性部の中でも分岐が起こって、絶対反対で闘うのか、労働者は団結できるのかをめぐって、二分、三分、四分やってます。昨夜も女性部三役の中でやるのかやらないのかでまだガンガンやっている。

これが資本主義終わりの時代に、革命情勢に向かっていく中で、激しい分岐として起こってきた。資本主義支えるのか、がんばって闘うのかの分かれ目です。

資本主義の終わりの時代に、資本家は最終的に労働組合を解体するしかない。なぜか。労働者が路頭に迷う中で怒りが充満している。そこに自分たちの権利や団結を掲げて労働組合が立ち上がったとき、そこと怒りが結合してしまう。恐慌に対して暴動が起こり、革命が起こっていく。自分たちの資本家としての地位が危ないということで「労働組合つぶさなあかん」と一丸となって乗り出しています。

その中で、自治労とか教労とかすべての労働組合執行部はどうなっているのか。20年前の国鉄分割民営化の時に完全に骨が折れています。「あんな風にはなりたくない」と自治労は思って、絶対反対の闘いを絶対やめると固く決心してきた。「質の高い公共サービス」とか、「職の確立」とか自分たちの職は評価される職であるという形でどんどん労働者性を失っていくところまで行き着いています。

橋下の道州制攻撃

労働組合の現場では何が起こっているか。橋下が登場して、賃下げして「働かない。ヌクヌクしている」とか、職場を盗撮してテレビで「働いていない」と言うとか。今までの労働組合だったら絶対抗議していた。ところが、実際にはシーンとしている。一切闘わず屈服路線を決めている。これは道州制攻撃という国のあり方ひっくり返す資本の攻撃です。橋下は「関西州をつくる」と打ち出しました。道州制議論などそれまでほとんど労働者の中では無かった。橋下は法律ができようができまいが関係なく目の前のことからやっていく。「広域連合」と言って首長を集めてネットワークを作っている。大阪市と大阪府を合体させていく。その橋下に日本経団連も「追いつけ追い越せ」でくっついている。このあいだ橋下と御手洗が会談しましたけれども、資本家はあんたについていくよと一致して、労働者をつぶすとなっています。

なかなか見えにくかった道州制攻撃が、橋下のおかげで公務員首切り・民営化・労働組合の解体としてはっきりしてきました。

自治労はじめ労働組合は裏切りの先兵になっています。道州制反対で組合大会で提起しても「この道州制についてはまだ勉強不足だから今後考えていくから」「いい道州制があるんじゃないか」とか言いながら、実際、道州制反対と言ったら「道州制反対は許さないんだ」という形でぶっ立って、ぶつかってくる。

今日も朝からうちの組合は「そういう集会はやらせない」と偽造ニュースをつくってまくまでに純化している。

今、首切り・民営化反対は私たちしかいません。私たちはそれぞれ単組で、自分の権利のことで、例えば保育所の民営化のことで目

の前の当局と交渉してきた。でも、組合の裏切りによって、屈服を強要されますけれども、実は労働者は自分たちで団結すれば、すごい大きい力になる。それが今発揮できる時だと、ここの集まりがそうですけれども、はっきりしてきたということです。

450名が結集した3・6府庁前行動（大阪）

公立病院の民営化攻撃

大切なのは民営化への怒りです。

この間、女性部でもさまざま議論がありましたが、道州制の最先端の攻撃として、公立病院の民営化ということが出されています。「公立病院改革ガイドライン」、3年間で黒字になる計画を出せというものですけれども、9割の公立病院は現在赤字です。銚子市民病院や松原市民病院のように廃止して、190人・160人の労働者を路頭に放り出すか、それとも民営化する。このどちらかの選択しかないとなっています。

うちの組合は、民営化のひとつの種類である「全適」を選択しています。

それが昨年12月のうちの女性部と当局との交渉の中ではっきりしたんです。「『ガイドライン』ってあるけれども実際それどうするんですか」と聞いたら、「地方独立行政法人化を考えています」「それって民営化じゃないですか」「そうやな。理解得るのはむずかしいなあ。でももう組合には言うてある」と言ったんです。「ええ!?組合に言うてある？　許せん！」ということで、ビラをまいて、そこからうちの組合執行部と激甚に対立しました。

うちの組合は「全適は民営化ではない」と言ってます。全適とは地方公営企業法全部適用と言って、豊中市が管理者でその間に経営コンサルタントみたいなものを入れて、経営とか財政とか丸投げするという、いわゆる民営化なんです。けれども。この民営化は民営化じゃない、直営だ、公務員のままだというふうに言って、真っ向から私らと対立しています。

現場の病院の労働者は、直営と言われるのと、民営化と言われるのと全然違うのに、「どっちなん」と混乱しています。

女性部委員会を一昨日開いたんですけれども、その中で、経過を明らかにしたところ、執行部から大量に人を送り込んできて、「民営化ではない直営なんだ。だから大丈夫なんだ」と労働者を最後までだましている。現場の生活と人生をどうでもいいと思っている。そこをはっきりさせないと絶対に責任を取りきれへんということが明らかになりました。徹底的に弾劾して今日を迎えていますが現場の労働者は「どうなってるんやろう」となっています。

民営化絶対反対の団結を！

ここで「民営化絶対反対の団結や」ということで、私がぶっ立っていることが、すべて今後の道を決めると思っています。

実はまだまだ少数なんですよね。現場では「いやー色々あるけどどうかな」とか。執行部が偽造ビラまいていると言ったら「そんなことほんまにあるの」と半信半疑。だけど、この事実をもって、次に挑んでいきたい。病院の民営化に対して、徹底的に責任取りきりたい。それが私が女性部やっている意味やと思ってますので、その中ではっきりすると思います。今半信半疑でも、現場が「やっぱり民営化やないか」となった時に、この旗の下に集まると思います。

今日は遠くからたくさん来てもらった。ここから新たな労働組合運動つくっていけるし、私らが何よりやるということです。この時代に労働組合はどうあるべきか。時代認識と路線で徹底的に議論しだ団結をつくりだすことです。この団結こそが闘う労働組合を甦らす力になります。そして、労働組合が道州制絶対反対の旗を掲げて大恐慌情勢に立ち向かいましょう。資本主義を打倒して労働者の世の中をつくりましょう。労働者には力があります。労働者の団結に生きましょう！

（3月6日、豊中市職女性部が全国に呼びかけた集会の基調報告を編集部の責任でまとめたものです。）

ひめじょおん
―女性部から

ジェコー労組のストライキに参加して

常任運営委員
電機労働者　中西美代子

世界中で労働者を食わせられなくなった資本主義に対し、怒りのデモとストライキが起こっています。新自由主義の破産は誰の目にもはっきりしました。だが新自由主義はその攻撃の手を緩めません。道州制という国鉄分割＝民営化型の首切り攻撃が始まりました。まず大阪で橋下知事との闘いが3・6で火ぶたを切って落としました。

神奈川でも2・19年休スト・県庁前座り込み闘争「道州制粉砕、賃金カット反対、県労連本部打倒」が満を持して決行され、全国から「生きさせろ！」の闘いを携えて3・20代々木公園への大結集が勝ち取られました。この道に勝利があります。この闘いが動労千葉に続く闘いです。

動労千葉ストライキに続こう

3・25に1047名闘争への反動判決が出ました。経団連は、ワークシェアリングを提起し、連合は闘わず、「労使共同宣言」で労働者を資本の攻撃の前に放り出しています。

電機連合は、ふざけたことに「派遣をやめたら国際競争力に負ける」と労働者派遣法の見直しにも反対しています。非正規の解雇者の救済のために1人200円カンパ5千万円を集めています。今組合がやらなければならないことは解雇撤回のはずです。こんなことでは労働者は生きられません。資本からも組合からも死ねといわれるに等しいではありませんか。

今、労働組合が問われています。労働組合こそが時代の最前線で闘うときです。労働者こそ社会の主人公です。その価値に目覚めさせるのがストライキです。生産の全ては労働者の手に委ねられています。その誇りをストライキで実感するんです。だから労働者を軽んじる考えに取り込まれなかったら労働者は必ず勝利します。労働者は自らの誇りを取り戻す闘いに、自己犠牲的闘いにも、敢然と立ち上がり呼応し、団結します。その証拠に動労千葉の春闘中に組織が拡大したのです。「スト破り」を蹴って動労千葉に結集した国労組合員の姿に感動しました。労働者はすごい。まだまだこれに続く労働者が登場してきます。問われているのは怒りだ！　行動だ！

あらためて動労千葉のように闘えば勝てると確信しました。

ジェコー労組のストライキ

ジェコー労組がストライキに決起しました。ジェコー労組は正社員組合が派遣労働者を組織し闘っています。はじめに決起したのは、女性労働者です。02年に神奈川で100名の労働者をリストラし、工場を埼玉に移し、派遣労働者を動員して億の利益を上げてきました。まさに労働者の血を吸って上げた利益です。女子保護規定は撤廃されて、労働者派遣法の元で、彼女たちは、何と7年間も「夜勤専門」で働かされてきました。この事実は怒りなしでは受け止められません。母体となる体は、ボロボロにされ、精神的にも追い詰められます。しかし彼女たちは立ち上がったのです。労働組合に結集して闘い、派遣から期間工になり、非正規撤廃＝正社員化要求の中、期間従業員92名が解雇されました。92名の解雇の白紙撤回を求めて3・24全日スト決行。私は共に門前闘争に参加しました。

労働者の誇りに満ちた集会

門前には暗い顔をした職制が30名ほど立ち尽くしています。門は一人しか通れません。派遣約80名も解雇され、夜勤の労働者は少なくなっています。

昼の春闘集会では動労連帯高崎、ジェコー労組がストライキの感想、思いを述べました。首切りに対する怒り、ストライキの開放感。仲間の力と、労働者の誇りに満ちた集会。静かな緊張感の中にも固い絆が作られました。両組合とも組織拡大が前進しています。

動労千葉のストライキに続き、09春闘「生きさせろ！」ゼネストを闘い抜こう。

「解雇撤回闘争」は労働者の生きる権利を取り戻す闘いです。道は開かれました。全国の仲間とこの道を進もう。

動労千葉労働学校で学ぼう！

2月28日に行われた労働者学習センター主催の第8期労働学校実践講座第6回（テーマ「労働組合とは何か」講師・中田一夫）での受講生の感想文を紹介します。

●医療労働者

職場闘争をつくる上で何を考えなければいけないか、教えられました。労働者の闘いは日和らずに闘えば、資本を乗り越えなければ解決しないという点に行きつきます。といって一般的に「労働運動の力で革命を」といっても、そこで職場の問題を闘おうとはなりません。まさに職場にあった路線の確立が闘いをつくっていく上で必須なんですね。相手の路線は「地域医療を守る」です。これに対抗する労働者の立場に立った分かりやすい路線がほんとうに必要なんだとわかりました。

●自治体労働者

建物にたとえると、時代認識は基礎工事、路線はその上に建てる柱の大きさであり、数ではないだろうか。基礎がしっかりしなければ柱は立てられない。立てたとしてもグラグラだろう。どんな地盤にどんな家を建てるのかを仮定してみるとわかりやすい気がする。自分としては今までかなり感覚的な労働運動だったなという気がします。より強いより大きな闘いをつくり出すために大きな学習会だったと思います。

●合同労組組合員

〝体制内との闘い〟とか〝自己変革〟とかの言葉の観念的な討論が少し気になったところでしたが、中野さんの話で「どんな労働者でもひとつとりえはある」「闘いによって変わった」「ワルが組合にはいることによって力になった」「あらゆる攻撃に団結して闘うことで10年前だったら一組合員だった人間が支部長になって『攻撃があってよかった。俺が変われた』」などの話を通して、労働者の可能性を感じられました。「労働者は闘わなければ腐敗する」ということも身近に感じました。長い間企業内組合にいて、ある意味でずっぽり体制内的あり方にはまり、嫌悪し、労働者の可能性についても失いかけていただけに、今回の講座に参加したことはよかったと思います。

●動労千葉を支援する会会員

・労働組合、市民運動、農民運動のそれぞれの論理があるという話の中で、労働組合というのは程度の差はあるが資本からの搾取を受けている存在という意味で利害が一致しているということがあらためて〝団結〟する上で重要なファクターであることが明確になった。

・体制内的思考ということは資本主義社会の中で生きている以上、それぞれの中にあるのはその通りだと思う。その際、重要だと思うのは、時代認識だと思う。時代認識は一方で客観情勢を正しく認識することと、社会そのものが階級社会としてあること、変革できる社会としてあることを、賃労働と資本の関係を正しく捉えていくところから労働組合運動においても決定的だということだと思う。

・中野顧問のまとめでの闘わなければ自分たちもダメになるということの重要性を感じた。党派闘争もいろいろな資本との闘争も。敵に対する闘争を通して、自らを鍛える（変革、飛躍する）ものとしてあるということが大事なのだと思う。闘い続けること＝実践を通してマルクス主義は体得されていくのだと思う。もちろん理論学習としての理論学習もあると思いますが。

第９期労働学校日程

■基礎編
2009年4月18日（土）13：00～
◆第９期基礎講座開校式
◆マルクス主義と労働組合
－『新版　甦る労働組合』について
講師　田中康宏（動労千葉委員長）
伊藤えりか
（労働者学習センター事務局）

■実践編
2009年5月23日（土）13：00～
◆第９期実践講座開校式
◆労働法制改悪との闘い
講師　岩倉芳之

■場所
DC会館（JR総武本線「東千葉」駅前）

トヨタ賃下げも

トヨタ自動車は18日、世界的な新車販売低迷による業績の急激な悪化を受け、今春闘で組合側が要求したベースアップ（ベア）要求に応じない「ベアゼロ回答」方針に加え、定期昇給分を圧縮する事実上の賃下げの可能性に言及した。

AIG通期赤字9・7兆円

経営再建中の米保険大手アメリカン・インターナショナル・グループ（AIG）が2日発表した08年12月期決算は、992億8900万ドル（約9兆7千億円）の純損失を計上した。同年10～12月期は、616億6千万ドル（約6兆円）の純損失となった。いずれも米企業史上最大の赤字額。

公的資本注入、世界で100兆円

主要国による金融機関への公的資金の資本注入額が100兆円に迫っている。米74兆、欧州16兆円。

米失業率8・1%

米労働省が6日発表した2月の雇用統計によると、失業率は前月より0・5ポイント高い8・1%に上昇し、83年12月以来、約25年ぶりの水準に達した。

資産、世界で4900兆円消失

アジア開発銀行は9日、世界で昨年消失した金融などの資産が50兆ドル（約4900兆円）に達したとの報告書を発表した。

失業手当終了後も支援

2日、政府・与党は、失業手当の給付期限が切れた失業者に、職業訓練中の生活費を支給する制度の検討を始めた。

生活保護駆け込み急増

全国17の政令指定都市が今年1月に受け付けた生活保護の申請件数は8590件で前年同月より約54%増えたことが2日、共同通信の調査でわかった。

倒産6年ぶり1300件超

東京商工リサーチが9日発表した2月の倒産月報によると、全国の企業倒産件数は前年同月比10・4%増の1318件で、2月としては03年以来6年ぶりに1300件台になった。

旧グッドウィル製造業派遣撤退

ラディアホールディングス（旧グッドウィル・グループ）は2日、製造業派遣事業から完全撤退すると発表した。また、4月15日付で技術者派遣部門の正社員の25%にあたる4千人を削減する。

日立「無給休日」、労組同意の方向

日立製作所の労働組合が、経営側から提案された無給の「休日」の導入に同意する方向であることがわかった。国内全社員が対象で、組合員の月額賃金を3～5%減らす実質的な賃金カット。

消費税2025年度17%に

日本経団連は16日、基礎年金の全額税方式への移行や医療、介護、少子化対策の強化など社会保障改革の安定財源を確保するために、25年度までに消費税率を現行の5%から約17%に引き上げるべきだとする提言を発表した。

ワークシェア制度化

政府、日本経団連、連合の政労使3者が雇用維持のために仕事を分かち合う「ワークシェアリング」の制度化で大筋合意する見通しとなったことが14日、わかった。

電機労使が共同宣言

電機連合と大手電機メーカー6社の経営側代表は14日開いた産別労使交渉で、労使が雇用の安定と創出に向け最大限の努力を行うとした「電機産業労使共同宣言」に合意した。雇用問題について労使が共同宣言を出すのは、産別では電機が初めて。

税評価額は簿価の7倍

日本郵政の宿泊保養施設「かんぽの宿」などの一括売却問題で、オリックス不動産への譲渡が凍結された79施設の、昨年の固定資産税評価額が計856億円で、帳簿価格合計（土地・建物）の123億円と約7倍もの開きがあることが18日、分かった。

職員手当270億円上乗せ

1日の報道によると、都市部の自治体職員に支払われる「地域手当」を、国の示す基準に上乗せして支給したとして、静岡、愛知、兵庫の3県と全国162市町村が、国から「財源に余裕あり」とみなされ、06、07年度で計43億7200万円の特別地方交付税を減額されていたことがわかった。

公務員、能力主義を徹底

政府は3日の閣議で国家公務員の能力・実績主義の徹底のため、採用や昇任に関する「採用昇任等基本方針」と、関連する政令を決定した。

公務員改革関連法案メド立たず

11日の報道によれば、中央省庁

の幹部人事を一元管理する「内閣人事・行政管理局」の新設を柱とした国家公務員制度改革関連法案の閣議決定がずれ込んでいる。人事院と甘利行革担当相の調整がつかないためだ。

社保病院売却を指示

舛添厚生労働相は6日、独立行政法人の年金・健康保険福祉施設整理機構（ＲＦＯ）に、社会保険庁が譲渡した計63の社会保険病院と厚生年金病院の売却基準を通知した。

ＪＲ東、無許可工事も２５０件

ＪＲ東日本が運営する信濃川発電所が信濃川から大量の不正取水をしていた問題で、同社が国に申請しないで行っていた無許可の発電所関連工事は約２５０件に上った。河川法などに違反する行為も常態化。同社は10日午後、首都圏を走る電車の電源となっている同発電所の運転を全面停止した。

都議の「不当な支配」

東京都立七生養護学校の元教諭らが都議3人と都などに損害賠償を求めた訴訟で、東京地裁は12日、慰謝料計２１０万円の支払いを3都議と都に命じる判決を言い渡した。03年に学校を視察した都議らが性教育を実践していた教諭を非難したことが教育基本法が禁じる「不当な支配」にあたると指摘。

「うつ教師、気が弱い」

自民党の笹川総務会長は14日、大分市内での同党県連大会で「今、学校では、うつ病で休業を続ける先生がたくさんいる。国会議員の中には（そういう人は）1人もいない。そんなに気が弱かったら務まらない」と述べた。

農水省「ヤミ専従」隠し

15日の報道によると、農林水産省が昨年4月、国家公務員法で禁じられている労働組合のヤミ専従調査を行い、全国の地方農政局などから職員１４２人に疑いがあるとの報告を受けていたことがわかった。その後、同省は組合側に確認調査の日付を教えるなどし、当日、無許可で組合活動をする職員がゼロになるまで調査を繰り返した。

小沢民主党に激震

3日、東京地検特捜部は、準大手ゼネコン西松建設から小沢氏側に流れた違法な企業献金問題をめぐって、民主党の小沢一郎代表の公設第一秘書を逮捕した。

海賊対策、海自に派遣命令

政府は13日午前、安全保障会議を開き、ソマリア沖の海賊対策のため、自衛隊法に基づく海上警備行動で海上自衛隊を派遣することを決めた。これを受けて浜田防衛相は同日、海警行動を発令し、海上自衛隊に派遣を命じた。武器使用権限を拡大する海賊対処法案も閣議決定された。

在留管理を厳格化

政府は6日、原則3カ月以上の中長期間、日本に滞在する外国人に新たな在留管理制度を導入する出入国管理法改正案を閣議決定した。従来の外国人登録証を廃止してつくられる「在留カード」は、ＩＣチップ付きで、不法就労者を一目で見分けられるという。

国に56億円賠償命令

東アジア最大の米空軍嘉手納基地の周辺住民５５４０人が国に損害賠償を求めた「新嘉手納基地爆音訴訟」の控訴審判決が27日、福岡高裁那覇支部であり、航空機騒音訴訟で過去最高となる計約56億2千万円の支払いを命じた。日米両政府に対する飛行差し止め請求は住民側控訴を棄却した。

首相「基地抜き」沖縄訪問

7日、麻生首相が就任後初めて沖縄県を訪問した。しかし、基地の視察はなく、仲井真知事との会談でも普天間飛行場の移設問題をめぐるやりとりはなかった。

都条例案に波紋

13日の報道によると、都が3月議会に提出した「繁華街で迷惑パフォーマンス慎め」という安全・安心まちづくり条例の改正案に、「表現の自由が侵害されかねない」との懸念の声が上がっている。

裁判員候補４人に１人が辞退

5月に始まる裁判員制度で、最高裁は13日、裁判員候補者約29万5千人のうち、ほぼ4人に1人にあたる約7万5千人から、70歳以上や重い病気、職業上の制限（議員や自衛官など）を理由に辞退の申し出があったことを明らかにした。最高裁は「想定の範囲内の数字。制度を運用できる一定の水準にある」としている。

非正規15万７８０６人失職

世界的な景気悪化に伴う企業の「派遣切り」などで、昨年10月から今年3月までに失職したか、失職が決まっている非正規労働者が全国で15万７８０６人に上ることが27日、厚生労働省の調査でわかった。

08年「JR尼崎事故糾弾　4・26尼崎労働者集会」。事故現場まで怒りのデモ

尼崎事故4周年弾劾、反合理化・運転保安確立、1047名解雇撤回
4・25尼崎現地全国総決起集会への参加のお願い

国鉄千葉動力車労働組合　執行委員長　田中康宏

107名の乗客・乗員の生命を奪った尼崎事故から4年を迎えます。

尼崎事故は、競争原理を至上として民営化・規制緩和に突進した新自由主義政策が生み出した惨事です。真の原因は国鉄分割・民営化という犯罪的政策そのものにあります。また尼崎事故は、労働組合が企業や政府の手先となったときに何が起きるのかを、恐るべき現実をもって今もわれわれに問いかけています。

国鉄分割・民営化がもたらしたのは、20万人に及ぶ国鉄労働者の首切りと組合潰し、そして尼崎事故でした。その結果、総評・社会党は解散に追い込まれ、労働運動は止めどなく後退し、労働者派遣法が改悪され、そして今、国鉄分割・民営化攻撃の全社会化というべき事態が起きています。昨年来、派遣や期間工として働く労働者が端から切られていくような首切りの嵐が吹き荒れ、公務員労働者には警察や自衛隊を除く360万人を一旦全員解雇し選別再雇用するという究極の民営化・道州制導入攻撃がかけられようとしています。現れ方は違っても、200万人にのぼるであろうという「派遣切り」と尼崎事故の根底にあるものは同じです。

JRでは民営化の矛盾が噴出しています。安全の崩壊や信濃川不正取水問題が示しているのはJR体制の末期症状に他なりません。私たちは、国鉄分割・民営化の原点に立ち返り、そこから再出発する決意です。国鉄分割・民営化攻撃に決着をつけるとき、日本の労働運動は間違いなく復活します。

一方、国鉄1047名の解雇撤回闘争も、重大な局面を迎えています。3月25日、東京高裁は、JRへの国鉄職員の「採用」の際に組合所属に基づく不当労働行為があったことを認めながら、「不当労働行為がなかったとすれば本件解雇もなかったということはできない」とする断じて許すことのできない不当判決を行いました。判決が示したのは、この攻撃に込められた今も変わらない敵の階級的意思です。またこの判決は、「解雇撤回」を取り下げて「政治解決」を嘆願する4者4団体路線の破産を示すものでもあります。

今こそ闘いの原点に戻らなければなりません。社会には怒りの声が満ちています。闘いの心棒が立てば、無数の労働者が団結して闘いに立ち上がる条件が生まれています。1047名闘争が全体を率いて闘い抜く大きなチャンスが到来しています。

世界中が「もうたくさんだ！」という怒りの声に包まれています。世界大恐慌が始まり、資本主

義体制は壊滅的な破綻にあえいでいます。労働者が社会の主人公として胸を張って登場しなければいけない時代がやってきました。これまでは多くの言葉の一つにすぎなかった「団結」の二文字が、労働者にとって、生き抜くために絶対に必要なものとなっています。今何よりも求められているのは、闘う労働組合が歴史の最前線に登場することです。

私たちは以上の趣旨のもとに、尼崎事故4周年にあたり表記集会を呼びかけることとしました。ぜひとも多くの皆様の賛同と参加をお願い致します。

2009年3月

集会名称　尼崎事故4周年弾劾、反合理化・運転保安確立、1047名解雇撤回・4・25尼崎現地全国総決起集会
・主　催　4・25尼崎集会実行委員会（呼びかけ／国鉄千葉動力車労働組合）
・日　時　2009年4月25日　13時から
・場　所　JR尼崎駅・北口駅前広場

3・25鉄建公団訴訟高裁判決徹底弾劾
1047名闘争に勝利の核心がある！

吉野元久（国労上野支部）

3・25判決は「一審原告らの請求については主位的請求を棄却し……」「1047名の解雇は有効だ」と判決しました。

不当労働行為による解雇を全面容認し、「国鉄清算事業団からの解雇が無効であるという一審原告らの主張は採用できない。その理由はおおむね原判決説示のとおりである」と国鉄改革法23条の前には闘っても一切無駄と切って捨てる、かつての05年9・15東京地裁・難波判決をより反動的に推し進めるものです。

「JR採用にあたって不当労働行為があった」などは問題にもならず、国鉄改革法に基づく「いったん全員解雇・選別再雇用」、さらには1047名の整理解雇の、これ以上にない不当労働行為を全面的に承認する大反動判決にほかなりません。粉砕あるのみです。

日本経団連と連合が「労使共同宣言」を結び、グッドウィルやキヤノン、そしてトヨタなど巨大資本が無法の限りを尽くして団結破壊と大量首切りに走った「新自由主義」の原点こそ国鉄分割民営化でした。

だが民営化の破綻、世界大恐慌――3月危機の只中で打ち出された、この3・25判決は、逆に国鉄闘争と大量首切りへの反撃が結びつくことに対する恐怖と、日本帝国主義の一切の猶予のない、追い詰められた労働者支配の破綻が表れています。

05年9・15判決は、「期待権で慰謝料500万」で解雇撤回を拒否し、しかも本州の闘争団の停職6カ月・停職2回以上を不採用とし、慰謝料の対象からも除外・分断することで、何より動労千葉を排除し、1047名闘争の全面的分断・解体を狙うものでした。現在の4者4団体は、この9・15判決に屈服する中から生まれました。今回の極反動判決は4者4団体路線が不可避に生み出したものです。

しかし、こんなもので22年の1047名闘争はつぶせない。それどころか、日帝支配の根幹を揺るがす勝利の核心がJRとの非和解的闘いである1047名解雇撤回闘争にあることがあらためて明らかとなったのです。

第2次国鉄決戦を軸とする4大産別決戦に突入しよう。動労千葉が呼びかける4・25尼崎闘争の爆発へ、直ちに怒りの大反撃に立ち上がろう。

沖縄―本土をむすび道州制粉砕・米軍基地撤去を

沖縄―本土をむすぶ労働組合連絡会　宮里勝博

沖縄―本土をむすぶ労働組合連絡会は「階級的労働運動の力で沖縄闘争に勝利しよう」のスローガンの下、06年6月におこなわれた「沖縄―本土をむすぶ労働者集会」で結成が呼びかけられた。その後、沖縄民権の会と共に、首都圏を中心に数次にわたるアメリカ大使館や防衛庁への辺野古新基地建設阻止行動、文部科学省への教科書検定撤回抗議行動を積み重ね、そのなかで結成が宣言された。

現在、東京における4つの合同労組（東京西部ユニオン・福祉労働者連帯ユニオン・東部ユニオン・なんぶユニオン）を中心に沖縄闘争を恒常的に担う共闘組織として活動してきた。階級的労働運動をめざす各労組の結集を今後も呼びかけたい。

私たちは、3月14日に東京で、道州制粉砕・辺野古新基地建設阻止・09年春闘勝利をめざして労働者討論集会を開き、道州制攻撃は沖縄闘争の解体であり、階級的労働運動の破壊であることを明らかにし、全力で反撃することを以下、決議した。

道州制は階級的労働運動の解体・改憲攻撃

長きにわたり労働者を賃金奴隷制の下で酷使・抑圧し、階級支配をほしいままにしてきた世界と日本の資本主義体制の歴史的命脈はここに尽き果てた。眼前で展開されている世界恐慌の現実がそのことを日々証明している。わたしたち自身の闘いと決起で帝国主義・資本主義支配の歴史に終止符を打つ歴史的好機が訪れているのだ。道州制粉砕、沖縄奪還・米軍基地撤去・日本帝国主義打倒の旗を高く掲げるときである。

道州制は世界恐慌下における日本帝国主義の延命をかけた行政丸ごと民営化、「究極の構造改革」である。360万公務員を一旦全員解雇、自治労・日教組を解体し、中央政府が外交・軍事・治安の中枢を独占する。

「自治州」とされる地域を総民営化し、弱肉強食の競争・市場原理で資本家独裁の王国を築く戦後労働支配の根底的・反動的転換であり、地方自治の解体、中央集権国家・侵略国家体制への再編・強化に他ならない。それは自衛隊のソマリア沖派兵を突破口とする憲法改悪に照準が合わされている。この階級的労働運動の解体・一掃の攻撃を粉砕することを宣言する。

誰が道州制を主導しているのか。日本経団連であり、関西経済同友会であり、沖縄経済同友会ではないか。「明治」期以来の日本資本主義の成立、とりわけ戦後における日本の労働者・人民支配を担い、恐慌下のリストラ・賃下げ・派遣切りをほしいままにしてきた資本家階級の統一司令部が、「国民運動」と称し自民党と一体になり、あたかも今日の危機打開が唯一道州制にあるかのようなキャンペーンをすすめている。ここに道州制の階級的本質がある。世界恐慌に追いつめられた彼らの危機であり、攻撃の鋭さとその弱点もそこにある。

3月6日、道州制反対・橋下打倒の大阪府庁前行動が爆発した。道州制粉砕の火柱が、「道州制は解雇問題ではない。地方分権の問題」と言い翼賛勢力と化した体制内労働運動指導部の制動を食い破って闘いとられた3・1沖縄現地で春闘勝利―道州制粉砕集会が成功裏にかちとられた。全国・全産別・全戦線で闘いぬこう。

米軍基地の是非、「沖縄単独州」は最弱の環

沖縄における道州制攻撃は、「沖縄単独州」という形をとって、戦

後沖縄階級闘争、反戦・反安保の中軸を担ってきた自治体・教育・基地労働者をはじめ全沖縄人民に襲いかかっている。これは①１８７９年の「琉球処分」、②１９４５年米軍占領・統治＝52年講和条約（本土からの分離支配）、③７２年「５・15本土復帰体制」につづく、「第４の琉球処分」にほかならない。道州制攻撃が「広域主権」というたてまえをとっているにも関わらず、なぜ「沖縄単独州」か。

その核心は、中央政府が外交（＝軍事）権を直轄・独占し、沖縄支配を画然と強化する「究極の沖縄―本土の分断体制」であり、「戦争と基地の島＝沖縄」の固定化・永続化なのだ。

しかも、「国民から基地税を徴収し（米軍基地の犠牲になっている）沖縄をサポートする」（江口克彦道州制ビジョン懇談会座長）とまで言い切り、「沖縄単独州」の欺瞞を隠蔽するために労働者階級を動員するというペテンまで弄している。

3・14沖縄―本土をむすぶ労働者集会（東京・杉並）

こうした道州制攻撃に対し沖縄における体制内勢力は、「沖縄特別自治州にむけた道州制の確立」（社大党）、「中央政府からの自立」「道州制によって沖縄の未来を切り開く」（民主党）、と総屈服の状況を呈している。歴史的に蓄積された歴代本土政府への不信感がその根底にあるとはいえ、かって私たちと戦列を組んでいた人たちの中からも「沖縄の自己決定権」「脱官僚」「自治権拡大」幻想に取り込まれ、道州制に無防備に自己をさらすだけでなく、その一翼を担う動きも道州制推進の突破口に、バネにしようとしていることを見抜かなければならない。

しかし、「沖縄単独州」こそ敵の「最弱の環」である。そして確信を持とう。

米軍占領期の土地闘争や自治権獲得の闘い、70年の「コザ暴動」全軍労ストライキを軸にペテン的「返還」を弾劾し闘いぬかれた70年安保・沖縄闘争、87年、昭和天皇の沖縄訪問に反対して「日の丸・君が代」を拒否した闘い、95年少女暴行事件を契機に爆発した基地撤去10万人県民大会、07年教科書検定撤回を求めた12万人の総決起、沖縄の労働者階級・人民の闘いはつねに日米両政府の戦争政策をその根底でゆさぶり本土の労働者階級との分断に抗し連綿と闘いぬかれてきた。

そのマグマの胎動は、臨界点を求めて勢いを増している。沖縄・本土を貫く70年安保・沖縄闘争がペテン的「返還協定」粉砕に発展したように、必ずや道州制のペテンは暴かれ、沖縄奪還、安保粉砕・日本帝国主義打倒を掲げた沖縄―本土を貫く、階級的労働運動の力が道州制を粉砕するであろう。

オバマ政権下でクリントン国務長官が来日し、麻生政権と結託して在沖米海兵隊の「グアム移転協定」の締結を強行した。日米首脳会談で「日米同盟の重層的強化」が宣言された。沖縄ではアフガン増派や北朝鮮「衛星」発射の対応で米軍演習が陸海空で激化し、事件・事故が多発している。「米軍再編で沖縄の基地負担軽減」の幻想は吹き飛ばされ、怒りが沸騰している。これらの怒りと一体化して職場・生産点で闘うならば、道州制は必ずや粉砕できる。

道州制粉砕・米軍基地撤去 5・15闘争の爆発を

求められているのは、反道州制闘争の核心に「沖縄問題」をしっかりすえた、１０４７名解雇撤回・国鉄闘争、三里塚・労農同盟、日米韓労働者の国際連帯の力であり、沖縄―本土を結んだ沖縄闘争の爆発である。

動労千葉、在本土沖縄出身労働者を先頭に、自治体・教育労働者のストライキ決起で09年春闘勝利、末期的危機に瀕している麻生政権を打倒しよう。辺野古新基地建設阻止・富田晋君解雇撤回、星野文昭さんを奪還しよう。

道州制粉砕・米軍基地撤去を掲げて、5・15沖縄行動を爆発させよう。

●ストライキ宣言（抄録）

動労西日本広島支部
山田和広（岡山駅契約社員）

契約社員を正社員にしろ！　私の職場の4割もの労働者が、契約社員です。1年ごとの契約で、最長5年までしか働けない。それ以上働こうとすると正社員登用試験を受けなければならない。だが、この試験の合格基準は公開されないし、親族がJRで働いているからなどのコネで合格させる、といった不当なことが行われている。こんな試験のために、職場の労働者同士が、いがみあったり、競争したりする。そうして、職場環境がどんどん悪くなっている。

自動改札の導入も原因だ。不慣れな人、年配の方に冷たい機械。人間性と安全を無視している。

また、賃金は時給制だ。働いても働いても昇給がない。実働時間で賃金が変動する。生活設計をたてられたもんじゃない。月給制にしろ！　私たちはフルタイム労働だし、正社員と同じ内容の仕事をしている。にもかかわらず時給扱いだ。毎月の手取りが14万円前後で貯金もままならない。生きるのに精一杯の賃金しかない。結婚なんて考えられない賃金だ。将来に希望を持って生活できるだけの賃金をよこせ！

動労西日本、ストライキに決起（3月14日岡山駅前）

JR西日本は、近年「安全」を推進していると言っているが、大嘘だ。私の職場＝岡山駅でも、自動改札が入ったからといって、改札口の要員を減らして、人間性を無視したローテーションで仕事をやらせている。しかも、在来線のホームには、瀬戸大橋線ホームを除いて駅係員がいない。高速で通過する列車があるにもかかわらずだ。ホームに安全柵を取り付けたり、転落検知マットを設置したりなどの対策もない。人が列車にひかれてからでは遅いのだ。まさに、安全無視そのものだ。

また、ワンマン列車といって、運転士一人で運転する列車の増発も問題だ。安全、安全と言いながら、運転士一人に責任を負わせ、過酷な労働を強制している。こんなことを運転士一人に押しつけるなんて、福知山線列車転覆事故を繰り返させるつもりなのか！

JR西日本は言っていることとやっていることが全く違う。お客様サービスと言いつつ、実際は無人駅の増加、中間駅のみどりの窓口の営業時間の短縮など、サービス低下だ。全く信用できない。

今、青年労働者の大半が、派遣・契約社員などの非正規雇用だ。自分の仕事に誇りをもってやっているのに、都合が悪くなったら首を切られ、必要なときだけこき使われる。私たち労働者はモノじゃないんだ。自動改札の部品なんかじゃないぞ。岡山駅を動かしているのは、駅長や助役、JR岡山支社じゃない。現場の労働者だ！

青年労働者の皆さん、労働組合をつくって闘おう！　JR西日本、JR貨物及び関連企業で働く青年労働者の皆さん！　動労西日本に加入し団結してともに闘おう！

（2009年3月14日）

●電機連合の屈服に怒り

岩崎電気労働組合前委員長
高橋英行

大恐慌下の09春闘は、連合・全労連では闘いのポーズすら資本に一蹴され、労働組合が大敗北を喫しました。とりわけ、電機、自動車の製造業大手での歴史的後退は、これまでに例のないものです。電機連合では、そもそも統一闘争のスタートラインから大手組合のパイオニア、沖電気が離脱しました。闘争中盤では、雇用の維持を理由にベースアップを断念、ストライキの歯止めを定期昇給確保に置きました。しかし、実際は、集中回答日である3月18日、日立、東芝、NEC、富士通、シャープ各労組が定昇凍結の会社回答をスト構えず受け入れたのです。定昇凍結にも係わらず、「賃金体系維持」とは労働者に対するペテンも実にはなはだしい。一時金も大手の大半は、業績連動型のため、闘わずして最低の数字となるのは

明らかです。その上で、賃金引下げの屈服を認めた、根底条件であるはずの雇用維持についてさえ、守られてなどいません。日立7千人、東芝4500人、NEC2万人、シャープ1500人、パナソニック1万5千人、パイオニア1万人の大リストラ（あるいは、人員削減）…枚挙にいとまがない状態です。大手でさえこの状況では、中小組合はさらなる労働条件の引き下げが目に見えて進むことは言を待ちません。本当にこれが60万人を越える組合員を抱える大産別、電機連合傘下の実態なのか、あらためて我が目を疑うほどです。

私の働く岩崎電気（組合員約1200名）の3月24日の回答内容は、賃金5％引下げ（1年間）、一時金・年間2カ月、時間外割増率を法定の数字にまで引き下げる、諸手当の支給を廃止するなどの会社逆提案を含めて、最低なものでした。執行部は、会社存続の危機に関わること、雇用確保を総合的に判断し、電機統一闘争からの離脱とならざるを得ないとして、あっさり了承しました。回答と共に『雇用の安定と創出に向けた電機産業労使共同宣言』に基づき、『雇用不安払拭のためのメッセージ』を会社に出させたと喧伝（けんでん）しています。

筆を進める自分も、思わず気落ちするような体制内組合の現状を長々と記してきました。しかし、この様な状況下にあって、職場の労働者の不安や怒りは、爆発寸前まで高まっています。会社回答を受け、私に社内電話を掛けて来た中堅の労働者がいました。「執行部了承で、もう本当に決まりなのでしょうか？　こんな会社回答で、高橋さんは納得しませんよね、ぜひあなたに暴れてもらって、何とかして欲しい」と漏らしていました。職場でも若い労働者が電卓をたたいて「年間これ位下がるな…いくらなんでもこれはひどい！」と声を上げています。

資本の生き残りをかけた大攻勢に、階級的な団結で闘おう！　職場の正規労働者や雇用が不安定な非正規労働者との団結を作り出すことに今後も必死に取り組みます。共に頑張ろう！

●星野さんと面会しました！

教育労働者部会　米山良江

2月24日、徳島刑務所の面会妨害を打ち破って「夫婦面会」という形で、星野文昭さんとの面会を果たしました。

開口一番、星野さんが大学の友人の名前を挙げました。「その人は同じ科の後輩よ」と答え、「私も71年の三里塚、沖縄闘争の現場にも行っていた」と自己紹介しました。ヤーヤーという感じで空気が和み、70年闘争の時代の中に戻ったような気持ちになりました。

挨拶の後は、第二次再審をどう闘うかについて真剣な討論が続きました。星野再審論を確立していく過程の苦闘、今の階級情勢の中でついに星野闘争が位置付いたという確信、対権力との抜き差しならない闘いとして構え直して闘うという決意。星野さんの話は実にわかりやすく説得力がありました。さながら、机を挟んで、会議をやっているような感じでした。私は終始頷きながら、星野さんを見つめて聞いていました。

看守の「あと2分」の言葉で我に返って、これだけは伝えたいと思うことを一気にしゃべりました。日教組全国教研のこと、アメリカの教育労働者との国際連帯、ランクアンドファイルでついに組合権力を取るときが来たと。星野さんは「うん、体制内は根っこがないんだ。現場が獲得できる」そして「根津さん、河原井さんによろしく」とにこっとされました。緑の作業服を着た星野さんは、とても若々しくさわやかでした。

Photo Document

2009年2月～2009年3月

強制執行、来るなら来い！

2・26　大阪

25日に始まった八尾市による森本政二さん宅への強制執行に対し、解同全国連西郡と、結成以来初めてのストライキで決起した八尾北医療センター労働組合は団結して決起し、徹底抗戦を構えて闘い、勝利の凱歌をあげた。

「労使一丸」ぶっとばせ！

2・26　東京

全国労組交流センターは、日本経団連への第4波デモに決起。320人が結集して「労使一体ぶっとばせ」「春闘・春闘・ストライキ！」の声を高らかに上げ、経団連会館を包囲した。

海自ソマリア沖派兵を許さないぞ！

3・14　広島

反戦共同行動委員会は、全国から100人の結集で呉基地近くの岸壁から、出撃態勢に入っている護衛艦「さみだれ」「さざなみ」と麻生ら出席の「出航式典」に対して怒りのシュプレヒコールを叩きつけた。

月刊 交流センター　2009年4月号　No.229　定価300円（本体価格285円）

全国労働組合交流センター　東京都台東区元浅草2-4-10　五宝堂・伊藤ビル5F　URL:http://www.k-center.org
TEL 03-3845-7461　FAX 03-3845-7463　郵便振替口座／00150-9-408647　E-mail:centergo@nifty.com

発行人／中野　洋　入江　史郎　　編集人／井上　長治